OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	回腸導管における新しいAntireflux Ureteroileal Anastomosisについて
Author(s)	板谷, 宏彬
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31880
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【56】

氏名・(本籍)	板谷宏彬
学位の種類	医学博士
学位記番号	第4135号
学位授与の日付	昭和53年2月2日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	回腸導管における新しいAntireflux Ureteroileal Anastomosisについて
論文審査委員	(主査) 教授 園田孝夫 (副査) 教授 神前五郎　教授 阿部裕

論文内容の要旨

〔目　的〕

上部尿路の変更術式として回腸導管は最も頻繁に施行されている方法であるが，最近になって予想以上に高頻度の晩期腎合併症，例えば腎盂腎炎，水腎症，結石形成，腎機能不全などが報告されている。これらの原因として，従来から無害なものとされてきた回腸尿管逆流（ＩＵＲ）の存在が注目されている。したがって今後，長期生存者が増加するにつれてこれらの晩期腎合併症は重大な問題になることが予想され，回腸導管においてもＩＵＲ防止機構を有する尿管回腸吻合術を施行する必要にせまられている。しかしながら数多くの試みにもかかわらず満足すべき術式は完成されていない。

そこで逆流防止機構の最もすぐれたモデルである尿管膀胱移行部（ＵＶＪ）の構築に着目し，膀胱尿管逆流防止機構のprimary factorを探って尿管回腸吻合部の形成に応用し，ＩＵＲ防止機構を有する新しい尿管回腸吻合術を考案しようと考えた。

〔方法ならびに成績〕

膀胱尿管逆流防止機構におけるprimary factorを探る目的で，胎児におけるＵＶＪの発生と発育を組織学的に検索し，また原発性膀胱尿管逆流症例に対して逆流防止術を施行した後の膀胱壁内尿管の形態を観察した。

これらの結果からＵＶＪの構成要素である膀胱壁内尿管，尿管鞘，膀胱三角部は最もおそく発育し，しかも膀胱壁内尿管由来であること，また膀胱三角部に関係なく膀胱壁内尿管によって逆流は防止されうることながら，primary factorは従来から有力視されている膀胱三角部ではなく，膀胱壁内尿管であることが考えられる。したがって尿管回腸吻合に際して，この膀胱壁内尿管に相当する形態を

作成すればＩＵＲの防止が可能であると考えた。

術式は導管長軸に一致して約3㎝の長さの尿管を回腸漿膜で回腸筋層に直接固定し，回腸尿管直接吻合はCordonnier 変法でおこなう。対象症例はすべて悪性腫瘍で，11例20尿管に対して施行し，1尿管は比較のため従来より当教室でおこなっているCordonnier 変法のみで施行した。

この結果はＩＵＲが3尿管にのみ認められたにすぎない。これらのうち1尿管は尿管固定の長さが1㎝と短かかったためであり，1尿管は50㎝H_2Oの圧ではＩＵＲは認められず，他の1尿管は極めて軽度なものであった。またこの術式によって術前に比較して通過障害の増悪をきたしたものはなく，むしろ4尿管において改善を認めた。さらに腎機能においても悪化を示したものはなく，腎盂腎炎の発症は認められず導管内の尿細菌培養も1例をのぞいてすべて陰性であった。

〔総　　括〕

回腸導管は当初よりlow pressure and none reservoir systemと考えられ，ＩＵＲの存在は腎に対して悪影響をおよぼすものではないとされてきた。しかしながらこの概念は誤りであることが報告されており，臨床的にも動物実験においてもＩＵＲの存在は広汎な腎盂腎炎をきたし晩期腎合併症の原因となることが明らかである。

しかしながら尿管回腸吻合においてＩＵＲ防止術を施行することは困難であり，すでに多くの報告がみられるが満足すべき術式はない。また実際の臨床症例においては尿管拡張を有することが多く，この場合にはさらにＩＵＲ防止は困難となる。その点ＵＶＪにおける膀胱尿管逆流防止機構のprimary factorが膀胱壁内尿管であることを探り，これに相当する形態を作成したこの新しい術式では，正常尿管はもちろん拡張した尿管の場合でもＩＵＲ防止が可能であり，通過障害もきたさないことを臨床例において証明した。さらに新しい術式で形成された尿管回腸吻合部を組織学的に，またＸ－線診断学的に示した。また従来の吻合術式と比較してＩＵＲ防止術としての利点，さらに回腸導管の場合のみでなく尿管回腸吻合術を施行するすべての術式に適用されうる新しい術式であることについて述べた。

論文の審査結果の要旨

上部尿路変更術として採用されている回腸導管造設術には回腸尿管逆流現象が起る。長期生存者には腎盂腎炎，水腎症，腎結石形成などの合併から腎不全に陥いる危険があり，antireflux Ureteroileal anastomosisを考案する必要がある。

著者は膀胱尿管逆流防止機構を組織学的および放射線診断学的に検討した結果，膀胱尿管逆流防止機構のprimary factorは，従来の説と異なり膀胱壁内尿管そのものにあることを証明した。

この機構を尿管回腸吻合術に応用することにより，吻合部が膀胱壁内尿管と同じ状態を作ることに成功した。この新しい方法を臨床例11例，20尿管に応用し，回腸尿管逆流防止に成功した。著者の術式は回腸導管造設術後の腎合併症を防止する点で高く評価されるものである。